

竹早だより

平成26年度 5月号
平成26年5月19日
東京都立竹早高等学校
文京区小石川4-2-1
電話03(3811)6961

問題を解くということ

校長 高田 純一

今日は問題を解くということの意味をセンター試験（国語）を題材に説明したいと思います。問題が解けるということの定義は次の通りです。

・ 正答の選択肢がなぜ正答なのか説明でき、誤答の選択肢がなぜ誤答なのか説明できる。

これが出来て初めて、その問題が「わかった」と言えるのです。何となく選んだら、たまたま当たったということ繰り返しても力にはなりません。次にはたまたま外れるということになってしまいます。もちろん、いつもいつもこんな丁寧な説明をしていたら時間がなくなってしまうわけですが、基本として押さえておくといいでしょう。

それから、「正答でないから誤答である。」というのは論理的に正しくありません。もう一つの正答であることを否定しきれないからです。こういう理由で誤答だと説明できなければなりません。「誤答にも根拠がある」ことを覚えておいてください。

選択肢は「根拠」で選びましょう。「根拠」に気づいたとき、マンガで言えば、頭の上にパッと電球が灯ります。反対に選択肢を「印象」で選んではいけません。かえって誤答につかまってしまいます。なぜなら誤答は目立つようにできており、正答は目立たずひっそりしているからです。次の問題は2014の国語の第2問、岡本かの子の小説の中の小問です。問題文は省略して、選択肢だけ見ることにします。

- (ウ) われ知らず
- ① 自分では意識しないで
 - ② あれこれと迷うことなく
 - ③ 人には気づかれないように
 - ④ 本当の思いとは逆に
 - ⑤ 他人の視線を意識して

当たり前のような簡単な問題ですが、正答は①です。正答は2文節がつながった自然な風情です。これに対して④や⑤は3文節がぎくしゃくしながら接続しており、典型的な誤答の姿です。①をもとに他の誤答を作ることはできますが、仮に④や⑤が正答の時、①などという誤答を作ることは困難でしょう。（私は裏をかくこともありますか……）

正答の置き場所にも工夫が凝らされています。簡単な問題なので、一か八（ばち）か意表を突く①に置いたのでしょう。①は一度何気なく通過してしまうと、戻ってくるのが難しい場所です。④や⑤に目を奪われているうちに、①の存在を忘れてしまってほしいという出題者の願望が込められているように思います。

ある大問（ダイモン、増上寺の芝大門と同じ発音です）で最初の3つの小問の正答が、②②②などと3連続になる確率は、国語の場合1/25で、100回に4回は出現するはずなのですが、実際には滅多に見かけません。入試問題は人間が作っているということの一つの証拠です。人間の作る物に難攻不落はありません。必ず攻略することができます。恐れず、ひるまず、立ち向かっていきましょう。

嵐を呼ぶ体育祭

5月9日（金）六義公園運動場にて、今年度の「体育祭」を実施しました。実行委員を中心とした皆さんが手際よく準備をしてくれたので、予定通りの時間に開会することができました。競技に対する皆さんの取り組みは大変真剣でした。大きなけがもなく、進めることができました。午後一番の各団パフォーマンス演技は、積み上げてきた練習の成果が発揮された素晴らしいものでした。大人数が揃った美しい動きが見られました。終盤になって雲行きが怪しくなり雷雨に襲われながらも、最後まで競技を行うことができました。ご声援を送っていただいた保護者の皆様、大変ありがとうございました。

本大会を運営した実行委員の皆さん、本当によくがんばりました。獅子奮迅の働きであったと思います。来年に向けて「進行」「招集」「審判」「記録」といった役割分担をさらに明確化し、計画を緻密にしていけば、一層スムーズな運営ができると思います。来年度、さらに進化した姿を見せてください。



5月・6月の主な行事予定

〈5月〉

28（水）中間考査始



〈6月〉

2（月）中間考査終・教育実習始

7（土）授業公開・保護者会

10（火）授業公開代休

20（金）教育実習終

